

## 脚気(3) 米糠の成分について

薬学雑誌 1914年度(大正3年) p 1013-1043

先月紹介したように、帝大農科大学のグループは米糠の脚気予防成分を探し、1910年7月の時点では無機塩に注目していた。しかし同年12月には新たな成分に到達する。そして東京化学会雑誌(日本化学会誌の前身)に発表し続けた(1911年1, 2, 4, 9月号, 1912年2月号, 1913年11月号)。

農芸化学会の設立、学会誌創刊は大正13年だから、彼らは農事試験場報告とか化学会雑誌を発表の場としていた。それにしても、この間、薬学雑誌には何の記事もない。ワード検索できないから見落としているかもしれないが、しつこく探しても見つからない。緒方、大澤、高橋順など医学科の有力教授は古くから薬学会会員である。薬学会は、細菌説に固執する東大医学部の側に立っていたためだろうか。

さて、鈴木梅太郎教授らは1911年オリザニンに到達。1914年になって、とうとう薬学関係者も薬誌に糠成分説に関する論文を発表した。執筆者は陸軍衛生材料廠試験科の近藤平三郎と五味尚幸。トップの陸軍省機務局長は細菌説にかかわり鈴木らを攻撃した森鷗外林太郎であったが、末端部局は関係ない(近藤は翌年東大薬学に戻り教授となる)。今まで

の薬誌での沈黙を破るように31ページの大論文である。鈴木らの仕事を解説し、それを自分たちが再検したという内容であった。

なお有効成分は当初、酸性物質に見えたのと、エイクマンが糠で治した東南アジアの脚気をベリベリといったことからアペリ酸と名付けた。しかし精製するうちに酸でないことが分かり、イネの学名オリザ・サティバからオリザニンと改名する。ピクリン酸塩として結晶化したものは糠の300倍以上の効力があつた。

薬誌の記事の年、1914年になっても東大医学部、陸軍の医学会権威は百姓学者の研究と擲揄したとか、内科の青山胤通、三浦謹之助、薬物学の林春雄らはいずれも伝染病説を著作、講演で主張した。しかし欧米では1912年にフングが「ビタミン」「ビタミン欠乏症」という概念を提唱し、日本国内でも1917年以降ビタミン説の支持が増えはじめ、1921年には慶應の大森らが臨床試験から脚気ビタミン欠乏説を主張、1925年には完全に確定した。

小林 力